注意！
■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農薬使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

農作物技術情報　第６号　野　菜

発行日　平成２５年　８月２９日
発　行　岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編　集　中央農業改良普及センター　県域普及グループ　（電話　0197-68-4436）

携帯電話用 QR コード

「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「http://i-agri.net」 携帯電話からは「http://i-agri.net/agri/i/」

- ◆ 施設果菜類　草勢維持と障害果の発生防止
- ◆ 露地きゅうり　草勢維持、摘葉と病害防除の徹底、台風への備えを万全に
- ◆ 雨よけほうれんそう　適切な品種への切り替え、秋雨・台風への備えを万全に
- ◆ 露地葉茎根菜類　収穫率向上のための適切な管理と病害虫防除

１　生育概況

（１）トマトの雨よけ栽培は梅雨時期の花落ちや草勢の低下から回復傾向にありますが、収穫果実は小玉傾向となっています。灰色かび病や葉かび病の発生に加え、青枯病、タバコガ類の発生も散見されます。

（２）ピーマンは収穫ピークを過ぎ、成り疲れによる草勢の低下や高温・乾燥による日焼け果、尻腐れ果等の障害果の発生がみられます。病害虫では軟腐病、タバコガの発生がみられるほか、斑点病、うどんこ病も散見されます。

（３）きゅうりの露地栽培では収穫ピークを過ぎたところですが、大雨による冠水や成り疲れ等により草勢が低下しているほ場がみられます。また、病害では褐斑病や炭そ病、べと病が増加傾向であり、害虫では一部圃場でハダニやオオタバコガの発生がみられます。施設抑制栽培では生育は概ね順調ですが、褐斑病、うどんこ病の発生が始まっています。

（４）雨よけほうれんそうの生育は概ね順調ですが、高温による生育停滞やしおれ、枯死がみられる地域があります。シロオビノメイガが広く発生しているほか、アブラムシ、ヨトウムシに加え、萎凋病、根腐病、立枯病、白斑病の被害も確認されています。

（５）キャベツは、7月下旬に定植した作型で生育の不揃いが散見され、株腐病等の病害の発生により出荷量が少ない傾向です。コナガ、ヨトウガ、モンシロチョウの被害もみられます。レタスでは、高温等の影響により軟腐病の発生がみられます。

（６）ねぎは、夏どり作型で収穫が始まっていますが、茎が細めの傾向で、軟白部の確保に苦慮しています。全般的に生育は概ね順調ですが、長雨等の影響により、土寄せ作業が遅れているほ場がみられます。黒斑病、軟腐病、さび病、べと病、ネギアザミウマ、ネギコガ、ネギハモグリバエの発生がみられます。

２　技術対策

（１）果菜類（トマト・ピーマン）

ア　施設果菜類

しばらくは気温が高い予報ですので、気温が高いうちは高温対策と十分なかん水管理を継続して下さい。また、今後秋雨前線が活発になるとハウス内の湿度が上がりますので、十分な換気を行うことと、病害虫の防除にはくん煙剤を使用する等、湿度を上げない工夫が必要です。

気温が低下してきたら、施設果菜類では夜間の保温を行います。

イ　雨よけトマト

裂果の発生を抑えるため、土壌水分の急激な変化を起こさないよう少量多回数のかん水管理と

します。ハウス外からの雨水の横浸透にも留意し、ハウス周囲の明きょの点検整備をしましょう。また、早期白熟を防ぐため果実に直射日光が当たらないようにするとともに、裂果軽減を考慮し最低気温が 14℃を下回るようになったら保温を行って下さい。

最終摘心時期は収穫打ち切りの日から逆算して決めますが、10 月末まで収穫する場合は、9 月上旬頃が目安となります。開花花房の上の葉を 2 枚残して摘心すると、放任するよりも果実の肥大が良くなります。

病害では今後、灰色かび病や葉かび病、疫病の発生が懸念されるので、これら病害に効果のある薬剤を選択し、防除に努めてください。高温期に萎れが多く発生したほ場では、次年度対策のためにきちんと診断を受け、萎れの原因を確認しておきましょう。

ウ　ピーマン

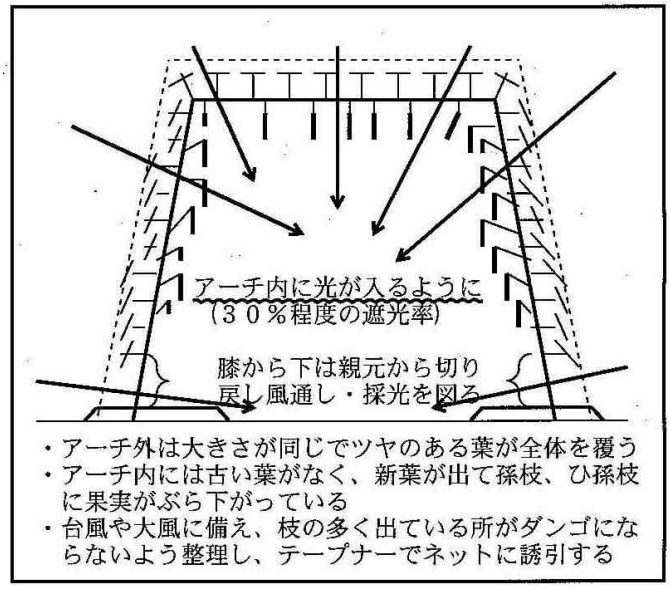
施設・露地とも尻腐果等高温による障害果の発生はまだみられていますが、気温の低下とともに黒変果の発生も増えてきます。ハウス栽培では最低気温 17℃をめどに保温を開始し、気象条件に応じて換気を行い、適切な温度管理に努めてください。

病害虫では、降雨後に軟腐病の発生が多くなる時期となります。軟腐病の予防には降雨前後の薬剤散布が効果的です。特に、タバコガの食害痕など傷の付いた部分から病原菌が感染しますので、地域の予察情報等を参考にタバコガの防除もあわせて実施して下さい。罹病果を圃場に放置すると軟腐病の伝染源となりますので、速やかにほ場外で処分しましょう。

（２）露地きゅうり

今年は特に草勢が低下している圃場が多いことから、不良果の摘果に努めて草勢回復を図るとともに、摘心はアーチの外側に飛び出しているところを指先で止める程度にとどめます。

摘葉は、生育後半でも太陽光がアーチ内部に十分入り込み、新葉が常に発生するように右図を参考に行います。



さらに、草勢回復には液肥を薄い倍率で葉面散布することも有効です。気温も徐々に低下してきますので、追肥は速効性の資材を利用するようにします。

病害では褐斑病、炭そ病、べと病に効果のある薬剤を中心に選択し、古葉や病葉の摘葉作業と併せながら効果的な防除に努めます。特に、アーチの上部で病害がまん延しないよう丁寧な薬剤散布に努めてください。

（３）雨よけほうれんそう

秋まき作型に向けた品種の切り替え時期です。品種によっては、高温で徒長したり、気温の低下により生育が大幅に遅れる場合がありますので、各地域で示されている作付品種体系に従い、適期に播種しましょう。

萎ちょう病等の土壌病害が多くみられたほ場では、次年度の対策として土壌消毒を実施しましょう。初夏に土壌消毒する従来の方法以外に、作付終了後の晩秋に土壌消毒を行う方法もあります。具体的な方法については、最寄りの農業改良普及センター等にご相談下さい。

気温の低下や秋雨の影響でハウスを閉める時間が長くなると、べと病が発生することもあります。抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して病害が発生しにくい環境にしましょう。

台風の影響を受けやすい時期になります。屋根ビニールが破損したり、ハウス内に雨水が流

入するのを防止するためビニールの破れの補修、ハウス周りの排水対策を再度確認します。

（４）露地葉菜類

ア　ねぎ

最終土寄せをした後の日数が長くなると葉鞘部のしまりが悪くなる等、品質が低下します。収穫の 20～30 日前を目安に最終培土を行いましょう。

収穫が近くなってからの病害虫被害は品質の低下に直結しますので、早めの防除を心がけましょう。なお、農薬の使用にあたっては収穫前日数を確認して適切に防除しましょう。

イ　キャベツ・レタス

高冷地の定植作業は終了しています。今後は収穫率が向上するように生育中の栽培管理をしっかり行い、適期収穫により収穫率の向上を目指しましょう。

大雨や長雨の時期になるので、ほ場排水を確認し、降雨後の防除が円滑に行えるようにしましょう。また、収穫終了後の廃棄株や残渣は放置せず、病害虫の発生源とならないように注意しましょう。

ウ　アスパラガス

普通栽培および立茎栽培のアスパラガスは、地上の茎葉部に存在している養分が地下部へ徐々に移行する時期となります。これからの追肥は養分転流の妨げになりますので、行わないように心がけましょう。株養成には茎葉部を健全に保つことが重要ですので倒伏防止対策をしている場合には、台風などに備えてもう一度ネットや誘引線の確認を行いましょう。

伏せ込み促成アスパラガスの株養成においても、茎葉部を健全に保つことが収量向上につながります。病害を防除し、倒伏させずに自然に茎葉が黄化するようにしましょう。

フラワーネットを利用して倒伏防止しているほ場の例

次号は 9 月 26 日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。